

論文題目: マラウイにおける学習者中心の授業の現状と課題
Current Status and Challenges of Learner-Centered Teaching in Malawi

新居 真梨子

「研究の目的と方法」

1990年の「万人のための教育(Education For All: EFA)」が決議によって、すべての子どもに基礎的な教育を与えることを目指した世界的な取り組みがなされた。これらの取り組みを受けて、1990年中ごろからサブサハラ・アフリカのいくつかの国では初等教育の原則無償化を特徴とする政策が主流となり、初等教育の就学率が劇的に向上することとなった。しかしながら、現在の教育開発の動向としては、しばしば教育の「量」的拡大に目を向けられており、「質」的改善が追いついていないという状況となっている。国の政策の実施によって急速に教育アクセスが上昇した結果、生徒数が大幅に膨らみ、教育の質をさらに低下させる結果となっている国も多い。学年そしてこの状況は他の地域と比べ、サブサハラ・アフリカ地域では特に深刻な問題となっており、教育の質の改善が急務となっている。

筆者は2021年8月から2023年3月までJICA海外協力隊(以下JOCV)に参加し、算数教員としてマラウイの地方にある農村の小学校で活動を行ってきた。活動した小学校では、ほとんどの授業で教員主導の授業が行われていた。また、小学校6年生であっても十分に基礎的な計算ができていない児童がたくさんおり、教育の質に大きな課題を感じた。しかしながら、教科書や机、椅子が一人ひとりに無い過酷な教育環境の中でも、授業に前向きに取り組み、知識を他者に共有したり、教えあったりする力が身につけている者も多数いた。このことから、この状況を改善するには、これまで繰り返されてきた教員主導の授業ではなく、学習者中心の授業に転換すればこのような物資が明らかに十分でないこの環境でも授業の質は改善していけるのではないかと感じた。

本研究では、教育環境が非常に厳しい状況にあるマラウイにおいて、学習者中心の授業は現地教員によってどのように実施されているのか現状を詳しく調査する。国全体の状況や制度については文献調査にとどめ、長期間にわたるマラウイの小学校に対して調査から見えてくる、学校レベルでの視点に着目しながら現状と課題について明らかにする。

本研究ではまず、マラウイの教育の現状について調査した。筆者は2021年8月から2023年3月の1年半の間、JOCVとしてマラウイに滞在し、現地小学校にて派遣されていた。この活動を活かし、現地教員の2週間の授業方法を詳細に観察し、現地教員にも簡単なインタビューを行った。これにより、普段の授業の様子を明らかにしていく。そして、「現状と課題を明らかにする」にあたり、日本での算数における学習者中心の授業の現状を整理し、比較・分析をする。また、マラウイで活動していた小学校教育分野で活動していたJOCV6名にアンケート調査を行い、筆者の活動地に限定することなく、より広範囲での調査も試みた。さらに、現地小学校において学習者中心の授業を実践した。どのような学習者中心の授業が実践可能なのか、実践が難しいものはどのようなものなのかを明らかにする。また児童の様子や教員反応を調査する。これらの調査結果から先行研究から見出された課題を踏まえ、総合的に結論を導き出した。

「論文の構成」

第1章 はじめに

- 第1節 研究の背景
- 第2節 マラウイ共和国
- 第3節 本研究の意義
- 第4節 研究の目的
- 第5節 研究の方法

第2章 学習者中心の授業

- 第1節 言葉の定義
- 第2節 学習者中心の教育の重要性
- 第3節 サブサハラ・アフリカにおける学習者中心の授業の課題
- 第4節 学習者中心の授業にかかわる先行研究

第3章 マラウイの教育

- 第1節 教育制度
- 第2節 マラウイの教育の現状と課題
- 第3節 算数教育の現状と課題

第4章 学習者中心の授業に対する実態調査

- 第1節 授業観察による調査
- 第2節 JICA 海外協力隊員に対するアンケート調査

第5章 学習者中心の授業の実践による調査

- 第1節 調査の概要
- 第2節 調査の目的
- 第3節 実践までの過程
- 第4節 授業実践内容
- 第5節 テストの結果
- 第6節 現地教員の反応

第6章 考察

- 第1節 授業観察から見た現状
- 第2節 授業実践に対する考察
- 第3節 課題
- 第4節 今後の展望

第7章 結論

参考文献

謝辞

「論文の概要」

本論は7章からなる。第1章では、研究の概要として背景と問題意識、マラウイの概要、本研究も目的、研究方法について述べた。第2章では、本研究のテーマである、学習者中心の授業の言葉の定義を確認し、その重要性について述べた。またサブサハラ地域や日本、ザンビアにおける学習者中心の授業現状を先行研究から明らかにした。第3章では、マラウイの教育について、教育制度、教育全体における現状と課題、算数教育について調査した結果を記した。第4章では、マラウイの農村にある小学校で行った現状の調査結果、JOCV へのアンケート調査結果について述べ、マラウイの中でも特に教育環境の整わない地方の農村にある小学校における学習者中心の授業の実態について述べた。第5章では、筆者による学習者中心の授業の実践内容、また現地教員の反応について述べた。第6章では現地調査、授業実践から考えられた、マラウイにおける学習者中心の授業の実態について考察した。第7章では、本研究のまとめとして結論を述べた。

先行研究では、すでにマラウイにおける学習者中心の授業の実態や課題について述べられているものがある。しかし、1年間半という長期にわたって現地を調査し、詳細にその現状を述べたものは筆者の知る限り無い。現地教員と実際に一緒に授業しながら、マラウイの学習者中心の授業の現状を調査した。ここに本研究の独自性[ss1]がある。

調査の結果、現地の教員は多くの授業はまだまだ教員主導の授業を行っていることがわかった。しかし多くの教員は、学習者中心の授業が求められていることを理解していながらも、その実践方法は児童の学びと結びつきにくい、形だけのグループ活動などに陥っていることがほとんどであることが分かった。インフラ整備が十分でなく、教育環境が非常に厳しいマラウイではあるが、学習への意欲が高い児童も多く、学習者中心の授業は効果的であるように感じられた。むしろ大人数であるがゆえに一斉授業を行うよりも、適した発問と、必要な情報を提示さえすれば、学習者たちは主体的に学んでいく姿が本研究の調査では見ることができた。

学習者中心の授業を実践する上での課題としては、これまで言われてきたように、文化に関わる課題、教員の質や言語能力における課題、テストを重要視する制度などの課題が確認できた。一方で、日本とマラウイでは、時間的な制限、や教員のスキル不足という点が共通した課題であることがわかった。このことから、形だけではなく本当に意味のある学習者中心の授業を実践していくには、これまで教員主導の授業におけるカリキュラム内容や時数では難しく、そしてそれを実践する教員に対しての継続的で地道な研修を行うことがどの国であっても必要であることが分かった。

学習者中心の授業を実践していくには、特に開発途上国においては、課題があることはすでに言われていることである。しかし、学習者中心の授業を実践していくのにまず必要とされるのは、日本のような整った教育施設ではなく、カリキュラムの見直しや地道な教員の研修や、教員の学びの場の保証であることが本研究から確認できた。

世界では教育の「量」から「質」的改革が叫ばれている。しかしこの質的改善は、開発途上国だけではなく、どの国においても、もちろん日本においても今必要とされていると筆者は考える。教員の学びを保証し、学習者を中心とした授業を実践していくことで、あらゆる国における教育の「質」的改革につながっていくことを切望する。